

福島広報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 岩下 聡
編集 同 広 報 部

【巻 頭 言】

ハンカチを持ち上げる

福島市立杉妻小学校長 鳴原 浩之

「今の若い者は」と同様に「最近の子どもは」という言葉を使いたくなる。しかし、子どもの姿はその時代の社会生活の上にたつものであり、容易に変えられないのは明らかだし、昔がすべて良いというわけでもない。私たち教師には、目の前の子どもと正対する覚悟が常に求められている。

私は毎年、就学時健康診断で三つの話をする。まず、「こんなこともできないと入学できないよ」と負荷をかけるのではなく、「一緒に練習していこうね」と期待をもてる言葉かけをすることである。それは“期待をもてる学校にしくは”という自分自身への気合い入れの意味もある。

また、「ハンカチを持ち上げる」様子を実演し、子どもの伸びようとする芽を見つけ、まずはそこを持ち上げることで課題も少しずつ成長へと向かうことを伝えている。東京オリンピックで日本バスケットボール界初の銀メダルに導いた女子チームH.Cのトム・ホーバスさんが、日本人ならではの特徴を最大限生かした戦術を徹底し、フィジカル面のハンデを克服したことが記憶に新しい。

最後に、「コップに失敗経験という水滴を貯める」その蓄積が、成功に向かう力を同時に育む大事な過程であることを伝えている。

さて、個別最適な学びと協働的な学びにより、全ての子どもたちの可能性を引き出すことを目指す「令和の日本型学校教育」が示された。これまでの個に応じた指導や教え合い・学び合いの概念を未来志向でとらえ直したともいえるが、子ども一人一人の伸びようとする芽を見極め指導に努めることに変わりはない。

社会の流れに翻弄されることなく、私たち校長も“なりたい自分”“ありたい学校”をしっかりと見据え、伸びる芽を見極めつつ成長を続けなければと思う。コロナ禍で当たり前を見直し変化を厭わなかった勇気、コロナ禍だからこそ当たり前を貫いた芯の強さ、校長としての覚悟で。

教職員の人となりを理解したい

福島市立瀬上小学校長 栗城 智也

幼少期、秋にはアケビや山ブドウなど山の恵を取って味わっていた。特に、スギワケ（正式名称はスギヒラタケ）という杉などの切り株に生える白い耳状の形をしたキノコが、小学生でも食用として分別しやすく、採集して、味噌汁や炒め物にしてもらいよく食したものだ。しかし、農林水産省によれば十数年前から毒性のあるキノコの疑いで食さないよう注意喚起がされている。急性脳症による死亡者が確認されており、以前から風土病的に存在していた可能性があるとのこと。驚きである。科学や医学等の進歩による時代の移り変わりをここでも否応なく感じてしまう。

私が新採用で勤めた学校では、新任校長の発案で午前の休息時間に職員室で職員が丸くなりお茶を飲んでいた。分校勤務だった私も週一回の合同授業で席を共にしていた。小規模校ということでできる和やかな一時であったが、その場では児童や指導の在り方にとどまらず世間一般的な話まで雑談をし、先生方の人となりを知ることができた。それが信頼感を育み、「チーム〇〇小」の礎となる時間だったと思ひ起こされる。多忙な業務でもそれに奔走することのない精神的な余裕があった。そして、それを支えてくださったのが当時の校長先生であったと改めて考えると感慨深くなる。

休息時間はとうに無くなり、働き方改革で時間も取れない、コロナ禍で懇親も深められない、当然ながらプライバシーには深入りできない、このような変化する環境の中で、校長職の自分は教職員一人一人をしっかりと理解しているだろうか、と時に自問してしまう。特に、若手には仕事ぶりに注目し指導言はするが、教職の尊さややりがいを感じさせることができているだろうか。「ないものねだり」をしても仕方がない。こんな時代だからこそ、限られた時間の中でも面と面を向き合い、互いの人となりを少しでも理解しあえる努力をしたいと思うこの頃である。

地域とともに充実した活動を

福島市立御山小学校長 菅藤 文彦

子どもたちは、学校での様々な活動を通して、学級や学年の友達のみならず、異学年の子どもたち、教職員、地域の方などたくさんの方々と関わります。そうした中で、今後社会に出て、たくさんの人々とつながっていくために必要なことを学びます。

本校では、御山地区の自然、歴史、文化について学ばせたり、子どもたちと地域の方々と触れ合う機会を設けたりしてきました。こうした学習では、地域の方にたくさんのお力添え、ご協力をいただいています。地域の名人に学ぶ学習や信夫山について調べる学習は地域の方にも大変喜ばれています。

新型コロナウイルス感染症収束の出口は、なかなか見えない状況ではありますが、感染症対策を十分にとりながら、「子どもたちが関わり合える場をつくる」にはどうすればよいかを、職員と保護者、地域の方と共に考え、御山地区ならではの特色ある教育活動の一層の充実を図っていきたいと思います。

そのためには、地域と学校が連携・協働するための組織的・継続的な仕組みをつくる必要があります。職員と地域の方が定期的に意見交換し、「より充実した御山小学校の教育活動をつくるために」という同じ目的をもって話し合いをすることで、職員が、地域の方と顔の見える関係を築いていけるのではないかと思います。そして、地域、保護者の方々と職員の顔の見える関係をますます深め、より信頼される御山小学校にしていきたいと考えています。

教育活動を通して、子どもたちに、御山地区のよさを実感させるとともに、御山で育ってよかった、離れてもいつかはふるさと御山に戻りたいという、御山を大切に思う心を育てていきたいと思っています。

「さあ、行こう！」

福島市立立子山小学校長 五十嵐 修

日曜日の朝、いつも決まった時刻に目にする自動車販売店のCMがあります。私は、そのCM中のせりふが好きです。「クルマは自由だ。私を新しい世界へ連れて行ってくれる。さあ、行こう！」

確かにクルマは自由で、自分の意志の通りに操ることができます。(最近クルマに操られている感じもありますが…)クルマが趣味という方は、この点に魅力を感じているのかもしれませんが…。一方、私たちは、人間が相手であり、様々な考えの中で仕事をしています。ゆえに、自分の意志の通りに進めるのはなかなか難しいです。みんなでベクトルを(いつ)にして取り組むために、学校経営のハンドルをどう切っていくか…。そのキーは、やはり、学校経営・運営ビジョンと考えます。毎月1回、全職員で、以下のようなビジョン評価を行い、改善しながら取り組んでいます。

- ①評価項目(学校経営・運営ビジョンの具体的実践事項)に沿って4段階で点数を付ける。
- ②集約し平均値を出す。
- ③職員会議で、成果と課題について確認し、改善点を絞り込む。

担当者を中心に課題に対する具体策を協議し、共通理解のもと取り組むというサイクルが定着してきています。全職員が学校経営・運営ビジョンを意識して取り組むことができるように、今後も改善しながら継続していきたいと思っています。

昔、「ナイトライダー」というドラマがありました。主人公・マイケルが、愛車・ナイト2000と意思を合わせながら、目的に向かってハンドルを切っていく物語でした。そのような関係性の中で学校経営を行えば、校長は学校というクルマを理想に向かって進めることができるのではないのでしょうか。くれぐれも自動運転システムに頼り過ぎないように…。

「さあ、行こう！」

「ちょっと話し合っていますか」

川俣町立飯坂小学校長 丹伊田 伸哉

小学生の頃、私を含むクラスの悪ガキグループは学級委員長のA子に目をつけられていた。私たちがトラブルを起こすとA子はすぐに先生の所へ行き、「ちょっと私たちが話し合っていますか」と訴え、学級会を始める。話し合い、「折り合い」をつけ、新しいルールが決まる。私は唇を少しとがらせながらもそのルールに従い、また学校生活を送る…そんな自分の姿を思い出す。

A子のようなリーダー的資質は特定の者だけで無く、全員が身につけていく必要があることは言うまでも無い。しかし、「ちょっといいですか?」と自分たちで話し合い、「折り合い」を付け、新たなルールに協力して取り組む姿を見ることのできるクラスは今どれだけあるだろうか?子どもに任せず、大人が全てを解決していないだろうか?

子どもに任せると失敗する、波風が立つ、時間がかかる…それを前提に考え、今年度の児童会活動の時間を前年比1.5倍にした。しかし、時間の確保だけで解決するほどそう簡単ではない。どうしても教師主導になってしまうのだ。「とにかく子どもに任せて…」そう言い続け、子どもの姿に変化が見え始めたのはこの秋。半年がかかった。

家庭で、職場で、社会で…私たちは話し合い、毎日何らかの「折り合い」をつけて生活している。子どもたちで話し合い、「折り合い」をつけ、解決していく経験もきっと将来につながると確信する。また、主体的・対話的で深い学びや協働的な学びにつながる重要な要素であるとも考える。指導に時間がかかり、結果が数字となって表れにくいものだが、これからも大切にしていきたい。

本校は、令和3年度で閉校。学校再編に伴い、148年の長い歴史の幕を閉じる。閉校行事をどうするのか、次年度のスクールバスなどはどうするのか…いろいろな方と話し合い、私自身日々「折り合い」をつけている真っ只中である。

レジリエンス

福島市立金谷川小学校長 宍戸 与一

野口聡一さんが乗る「レジリエンス」と名付けられた宇宙船。困難な状況に陥っても心が折れることなく、しなやかに立ち直る。そんな決意を込めて、野口さんたち4人の乗組員が命名したそうです。

「レジリエンス」

逆境に負けない力、回復力・弾力性などと訳される。ストレスといった外的な刺激に対しての柔軟性を表す言葉。

困難な状況に陥っても、しなやかに受け止めて適応する力ということでしょうか。なぜか最近よく目に留まります…。

学校にとって「信頼」はとても大切なものです。しかし、価値観の多様化等の社会の変化によって、学校が「信頼」を得にくい状況になっていると感じています。現在でも多くの保護者は学校を「信頼」していますが、その「信頼」は以前に比べると脆いものとなっているように思います。

学校はどのように「信頼」を得ていくのか、そのためにはどのような「教育」をすべきなのか。日々自問自答。

何が起きるか予測がつかない状況下では、校長には型を超えた幅広さが求められるのでしょうか。前向きに、よりよくしていこうとする姿勢を忘れないようにしたいものです。「ともに働く仲間へ元気をもらって、学びながら成長する」。このことは、どんな状況であれ普遍的であると思います。

校長自らが等身大の自分を見せ、教職員との間に信頼関係を築き、一人一人が最大限の力を発揮できる環境を整えていきたいものです。

日々の業務を終え、翌日にやってくる同様の仕事をこなしていくために、今や学校では、レジリエンス無くしては簡単に力尽きて、燃え尽きてしまいそうです。しなやかな対応力、レジリエンスを最も必要とされるのは、もちろん、私自身ですが…。

当たり前のことをしっかりと

福島市立北沢又小学校長 菅野 智

教員生活も残り少なくなってきた今日この頃、ふと、当たり前のことを改めて考えることが多くなったような気がします。例えば、「質の高い教育とは?」「きめ細かな指導とは?」など、今更なことを考えてしまうのです。自分では、「子ども一人一人が将来自立した大人になるために必要な資質や能力を身に付け成長することができる教育や指導」がそれに当たると思っています。そしてそれは、日々の当たり前の学校生活の中で、先生方の努力と子どもたちのがんばりで実現できるものだと思っています。

そのためには、これも当たり前のことですが、教育公務員としての自覚と責任感をはじめ、学習指導力、学級経営力、危機管理能力、保護者対応力など、子どもたちに直接指導をする「先生方の資質・能力を高める」ことが校長の仕事となります。もちろん、子どもたちの実態や課題はしっかりと把握しなければなりません。しかし、直接指導するのは、校長ではなく先生方です。あくまでも裏方として先生方を支え育てることが校長の役割となります。

しかし、ここでやっかいなのが、校長も教師であるがゆえの「直接子どもたちに関わりたい、指導したい」「直接子どもたちの成長を感じたい」という感情です。校長3年目の私は、未だこの感情を抑えるのが難しく、ついつい担任より前に出て指導をしてしまいそうになります。その都度、「孤独に耐えることも校長の資質の一つ」という先輩の言葉を思い出し、子どもたちに直接関われなくても、「先生方を育てる」という校長の役割をしっかりと果たしていけば、必ず子どもたちは成長できる」という当たり前のことを、日々、しっかりと行うことで、残り少なくなってきた教員生活を、校長として全うしていきたいと思っています。(そのせいかどうか、校長室での独り言が増えていると周りから言われます…涙)

健康教育の推進に向けて

福島市立平田小学校長 川名 健一

私が所属する地区小学校長会西方部では準備期間も含めて平成30年度から3か年にわたり、「健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方」について研究を進めてきました。

研究開始当初は西方部にある10校の取り組むべき健康課題は、おおよそ「歯・口腔」「肥満」「スマホ等依存」の三つに集約されていました。しかし、令和元年度末から令和2年度始にかけてのコロナ禍による学校の臨時休業により事態は一変。一日の大半を家庭で過ごすことを余儀なくされた子どもたちの多くは生活リズムを崩し、学校再開となった6月以降も一部の子どものうちではありますが、学校生活に適應するのに相応の時間を要する様子が見られました。各校の健康課題にも変化が見られ、「スマホ等依存」傾向の拡大に危機感を持つ割合が多くを示すようになり、次いで「体力低下」「肥満」「歯・口腔」と続き、「食生活の乱れ」に目を向ける割合も増えました。

もちろん、これらの課題はコロナ禍における子どもたちの家庭生活の急激な変化によってもたらされたものと言えます。しかしその実、それまで各校が抱えてきた健康課題の根本も家庭での生活習慣の乱れによるものなのかもしれないと考えるに至りました。というのも健康課題のほとんどは「習慣」の問題であると言えるからです。体力に関しては「運動習慣」、肥満は「食習慣」、むし歯は「生活習慣病」の一つだという歯科医師もいるように食習慣、歯磨きの習慣によってのみ改善、予防がなされるということです。そうであれば学校側からの一方的な指導、支援だけでは改善されるものではないと言えます。現在は保護者や地域に効果的に働きかけをしながら、家庭の教育力を高め、家庭と十分に連携して改善に導く方策を模索しています。詳しくは来年2月刊行予定の「県小学校長会 研究集録第44号」をご覧ください。

ロードバイク

福島市立月輪小学校長 蓬田 孝夫

ロードバイクという乗り物をご存じでしょうか。休日の農免道路や峠道で、びちびちの専用ジャージに身を包み空力特性に優れたデザインのヘルメットをかぶった方が乗り、結構なスピードを出して走っている自転車を見たことはありませんか。ドロップハンドルを装備した大変細身なこの自転車こそが、ロードバイクです。

十数年前のことです。ロードバイクに関するムック本を購入し読んでいたうちに、どうしても経験してみたくなってきました。「やらずに後悔よりやって後悔」とばかりに、ホームセンターで1万円前後で自転車が買える時代に、大枚をはたいて手に入れました。実際に乗ってみると、「軽い、速い、長時間乗っても疲れない」と、これまでの自転車の概念が大きく崩され、まったくの別物と感じました。買って後悔どころか、「もっと早く経験しておけばよかった」と強く思いました。

それからは、約22kmのコースを55分間程度で走ることを日課として走り続けていました。体を動かすことでストレスが発散されるとともに体調も良くなり、仕事もはかどるようになった気がしました。ものの本によると、ロードバイクに乗ることは「非日常（スピード、細かなギヤの操作等）を味わうことでストレスを軽減する」「シートに跨ってペダルを漕ぐ運動のため、直接、膝や腰に体重の負担がかからず長く続けられる」「無理のないペースを保つことで、有酸素運動となり、心肺機能の向上や基礎代謝を上げることにつながる」等の効果があるそうです。

慣れてきたころに、桑折・相馬往復や桑折から東京タワーまで3日間の旅（帰りは新幹線）等も経験しました。しかし、五十代の後半となった現在は、無理をせず、約11kmを30分間前後でのんびり走っています。心と体の健康のために、自分のペースで続けていきたいと思っています。

フォルモサ

福島市立佐原小学校長 星 文行

私は、2003年4月から3年間、台湾にある台北日本人学校に赴任していた。台湾は16世紀にポルトガル人に発見され、美しい麗しの島「フォルモサ」と名づけられた。現在、日本との正式な国交はないが、距離的に近く、東日本大震災ではいち早く援助の手を差し伸べてくれるなど親日的であり、儒学の教えの中、治安もよい国である。

私が赴任した年の4月には、中国の広東省や香港、カナダなどでSARSが流行し始めていたものの、台湾では感染者はいないとされ、通常通り、妻と生後五ヶ月の長男を伴い台北に赴任した。街のあちこちに南国の植物が多く見られ、市場には多くの見慣れない果物が並んでいた。また、様々な種類の中国料理店や屋台料理があり、味を楽しむことができた。

ところが、4月下旬になると、台湾でもSARSの感染が広がった。院内感染が起きた病院が突然閉鎖されたり、自分たちが住む地域の日系デパートの店員に感染の疑いが出たというだけで、運動会が急遽中止になったり、地下鉄でのマスク着用が義務化され、幼い長男にも顔が隠れるようなマスクをかけさせる必要が出たりなど、今のコロナ禍の状況と同じように、感染への不安や様々な制限、混乱の中で、我慢を強いられる生活を送ることになった。また、日本人学校の児童・生徒も半数近くが帰国する事態となった。

7月4日、台湾の感染者がゼロとなり、放送でSARSの終息宣言が流れ、校内に歓声が広がったのを今でも覚えている。ようやく島内の観光にも出かけられるようになり、初めて出かけた淡水（地名）での、川面とマングローブを幻想的に赤く染める感動的な夕日を見て、赴任4か月目でやっと、「フォルモサ」を実感することができた。

長期間続くコロナ禍も、台湾で経験したように、いつか終息する日が来ることを待ち望んでいる。

今後の生徒指導に向けて

～県生徒指導部のアンケート調査結果から～

福島地区生徒指導部長
福島市立笹谷小学校長 佐藤 和暁

県小学校長会生徒指導部でのアンケート調査について、福島地区の主な結果、状況と今後の生徒指導の方向性を確認したいと思います。

【調査A】子どもたちの心のケア

- SCは73.1%の学校で活用され、1校あたりの平均活用回数は65.9回となっていること。SSWは48.9%の学校で活用され、1校あたりの平均活用回数は6.7回となっていること。SC、SSWはその約7割が、児童の心のケアや不登校に係る対応に効果的に活用されていること。

【調査B】不登校、いじめ、等

- 不登校児童は増加しており、前年度から不登校が継続している児童数が増加していること。いじめの認知件数は、昨年度に比べて約2倍の125件と大きく増加し、重大事態に至っているケースも複数件あること。

【調査C】ネット、SNS利用の実態

- ネット、SNSを利用している児童は80.1%（前年比+3.4%）と増加し、自分用の端末を持っている児童は60.9%（前年比+7.7%）、ネット、SNSに関するトラブルがあったという児童も6.7%（前年比+1.8%）と増加していること。更に、ネット依存等で通院、治療を受けている児童も複数名いること。

このことを踏まえ、今後の生徒指導について校長として次の対応が求められると考えられます。

- ① 自校の現状を捉え、特に、不登校やいじめに関しては、早期からの対応ができる校内体制を構築しておくこと。
- ② SC、SSW等を積極的に活用するなどにより、担任教員等の負担感を軽減していくこと。
- ③ ネット、SNSについては、学校での指導・対応には限界もあるので、児童の指導とともに保護者への啓発の機会を設定していくこと。

協働的な学び

～予測困難な時代に 福島地区校長会で～

福島地区研究部長
福島市立森合小学校長 渡邊 かほる

令和2年度から提示された主題に基いた継続研究が、福島地区各方部長のリーダーシップの下、各方部の研究推進委員が中心となり、真摯に進められてきた。今年度は、まとめの年となった。

福島県小学校長会支会研究協議会（8/19）を開催し、令和2・3年度継続研究が発表された。

<発表方部>

- 東方部 第4分科会「豊かな人間性」視点1
- 西方部 第5分科会「健やかな体」視点1
- 南方部 第10分科会「社会との連携・協働」視点1

<希望方部>

- 北方部 第1分科会「経営、組織・運営」視点1
- 飯坂・信陵方部 第9分科会

「自立と社会性」視点2

- 川俣方部 第3分科会「知性・創造性」視点2

<指導助言>

県小学校長会研究部長 佐藤 浩昭 様

例年、1日の日程で協議会を行っていたが、コロナ禍の中、計画の段階で半日に短縮し、実施直前で、オンライン会議となった。短時間でも協議会の充実を図るため、研究部として次のことを提示した。発表内容焦点化「原稿A4表裏」、校長の役割明確化「県の研究手引きP8活用」、協議の活性化「思考ツールによる協議」である。これらの成果・課題と、「校長の役割」について究明できたかどうかについて、分析し、次に繋げたい。

校長会にとって、「研究部」とは何だろう。意味付けは、各自行うことではあるが、予測困難な時代だからこそ、学校を任された校長同士が、役職や年齢の垣根を越えて、自由闊達に意見を述べ合い、協働的な学びをする重要な場であると価値付けしたい。来年度から、令和4・5年度新主題の研究が始まる。福島地区小学校長会研究部で、「協働的な学び」をより一層実現していきたい。

編集後記

編集作業を進めている現在、新型コロナウイルス感染症はやや収まりを見せています。学校にも心なしか以前の活気が戻った雰囲気さえ漂います。しかし、現実はその甘くはないことも認識しています。

お寄せいただきました玉稿より、第6波に備えるヒントを学びつつ、令和3年度後半の教育活動の充実に向けていかなければならないと気持ちを引き締めたところです。ご協力ありがとうございました。

福島市立湯野小学校長 根本 幸枝